

戦火のシリアからアメリカの大学へ

——『高等教育クロニクル』の記事より——

宮 田 実（訳）

Syrian Students Find a Haven in the U.S.

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

アレッポからピオリアへ

平和な時であればシリアのアレッポからレバノンのベイルートまで約7時間で行くことができる。しかし、2013年の7月、23歳のマリエラ・シェイカーが戦火にまみれたシリアのアレッポからアメリカ合衆国イリノイ州ピオリアへの旅路の第一歩を踏み出した時はベイルートまで17時間もかかったのである。

アレッポからの主要道路は閉鎖されていた。バスの運転手は慣れない道路のため道に迷い、マリエラが見たこともない乾燥した景色の中を何時間も走った。その途中、兵士たちがバスに乗り込んできて乗客の身分証明書をチェックした。その時はちょうどイスラム教徒が断食をするラマダーンの時期であった。マリエラはクリスチャンであるが、注意を受けないように飲食物は持ってこなかった。

家族との別れはあわただしいものであった。マリエラは母親と兄とバス停で待っていると突然バスがやって来た。2人との別れのハグとキスの後、マリエラはいつ再会できるかわからないままバスに乗り込んだ。彼女の持ち物はバッグ1つとバイオリンの入ったケースのみであった。そのバイオリンは彼女がアラブ音楽学校を首席で卒業した時に母親から贈られたものである。バスの中で彼女はその大切なバイオリンをしっかりと抱えていた。

平成26年3月10日 原稿受理
大阪産業大学 教養部

兵士たちがケースを開けるよう命じた時も。

内戦がひどくなるにつれてマリエラは、音楽家としてのトレーニングを続けながらシリアから脱出する機会をうかがっていた。アレッポの町は激しい戦闘に耐えていたが、2012年の夏ごろからマリエラのアパートでは頻繁に停電が起こっていた。それでも彼女はバイオリンを演奏し、教え続けた。そして、2012年の秋から冬にかけて、発電機がありインターネットが利用できる地元のカフェを渡り歩いた。

2013年の1月にマリエラはイリノイ州にある小さなリベラルアーツ大学であるモンマス大学を見つけた。その大学はシリア人学生に対して少なくとも8種類の奨学金を提供していたのである。1週間で彼女はすべての必要書類を作成し、母親はそれらの書類を英語に翻訳してもらうために奔走した。そして3週間後、マリエラは合格通知を受け取ったのである。

シリアでは熱意のある学生にとって将来の見通しはとても暗いと言わざるを得ない。2011年に内戦が始まって以来、死者は10万人を超え、何百万人もの人々が祖国を離れた。2013年にアレッポとダマスカスの2つの著名な大学が爆撃され、その結果シリアの高等教育が不安定な状態になった。それを受けて、シリアの学生を支援するために36以上の大学で構成される世界的なコンソーシアムが生まれた。モンマス大学はそのメンバー大学の一つである。

マリエラは年間の学費と生活費合わせて4万ドルをまかなうために、大学からの奨学金、シリアのクリスチャンのための国際的な組織からの支援、サウジアラビアのビジネスマンからの寄付を受けることができた。彼女は2012年にアレッポ大学から経営学の学士号を取得しているので、モンマス大学では2つ目の学士号をめざして音楽専攻の3年生に編入した。

アレッポからの暑くて長いバスでの移動を経てアメリカにやってきたマリエラはまず初めの1か月を10年以上前にシリアから来ている友人たちとフロリダで過ごした。その後、8月16日にモンマス大学のあるイリノイ州ピオリアへ向かった。空港でモンマス大学の学生に出迎えられ、大学のキャンパスに到着した。迫撃砲が今も町を破壊している祖国に家族を残してきたことに心を痛めながら、マリエラはモンマス大学のレンガ造りの建物が気に入った。ここが第2の故郷になると思った。ここは彼女にとってなによりも安全な場所であった。マリエラに続いて20人の新たな留学生が到着する予定である。その内、10人はシリアからの留学生である。彼らはここアメリカ中部の小さな大学で学び、生活しようとしている。

モンマス大学の取り組み

2012年の暮、イリノイ州の大学連合の月例会でイリノイ工科大学の代表がシリアの学生に対する援助を嘆願していた。同大学はシリアの学生たちに奨学金を支給しようとする団体に協力していたのである。当時シリアの状況は悲惨で、日毎に悪化していた。政府軍とアサド大統領の独裁政治に反対する反政府勢力との戦闘は全国的規模にエスカレートしていた。政府の管理下にある大学は一応開いてはいたが学生たちはほとんど授業に出ることができなかった。

モンマス大学のブレンダ・トゥーリー教務副部長はシリアからのニュースに注目していた。学長からも外国人留学生を増やすよう要請されていた。彼女は2年前フルブライト奨学生としてブルガリアに滞在していた時にとっても印象深いシリア人学生たちに会ったことがある。彼らがその後どうなったかがとても気になっていた。

トゥーリー氏はモンマス大学の経営のトップに掛け合った。その結果、奨学金給付の許可を得たのである。彼女は早速、奨学金給付を推進する国際教育協会宛てのメールでモンマス大学の提案を伝えた。その内容は、2人の優秀な留学生に対して授業料全額免除、さらに数人に対する生活費を含む学費の半額免除である。その財源を確保するために2013年の春までに大学は卒業生などからの寄付を募り始めた。

モンマス大学のディツラー学長は次のように述べる。「ワールドコミュニティにおける一大学の責務はたとえ少人数であっても必要とする人々に教育の機会を提供することなのです。我が大学はシリアからの留学生を50人も100人も受け入れることはできません。しかし、10人ぐらいであれば受け入れることができます。」

収入の多くを授業料に頼るモンマス大学としては思い切った提案といえよう。しかし、この提案は世界全体のニーズに応える小さな一歩に過ぎない。シリア人学生に対する支援プログラムが始まって数か月で5000人以上のシリア人学生が奨学金の情報を得るために、国際教育協会のオンラインのアンケートに答えた。

トゥーリー氏はシリア人からのモンマス大学に関する問い合わせのメールを大量に受け取った。中には難民キャンプから届いたものもあった。100通以上のメールすべてに対してトゥーリー氏は返信し、奨学金の内容や申請方法を知らせた。

もう一人のシリア人学生のアナス・カーカウトはこのような就学支援を切望していた。彼は2012年の秋、シリアのダマスкас大学への進学を考えていた。しかし、願書提出の日、大学へ行くのに2時間以上かかったのである。なぜなら政府軍の戦車が連なる道路にはいくつかの検問所があったからである。この経験から彼はシリアの大学への進学を断念した。その後2013年の初めにかけて彼は家にこもっていた。上空には戦闘機が大きな音

を立てて飛び交い、窓は近くで起こる爆発で揺れ動いていたから。自宅のインターネットは時折使えなくなった。2013年の2月に彼はイリノイ工科大学の奨学金の情報を得たが、その奨学金が得られても同大学の授業料は彼にとっては高すぎるのがわかった。シリア人学生支援団体へのメールで彼は経済的な問題を訴えた。それに対して、他の大学の選択肢もあり、その一つがモンマス大学であるという答えが返ってきた。

アナスは他の大学を調べるのをやめ、アメリカの中西部にある小さなモンマス大学に希望を託した。3月のある日、彼はモンマス大学から連絡があることを確信していたので、寝ないで30分おきにメールをチェックした。時差は8時間あった。午前7時、空が白みかけた頃イリノイ州での就業時間はとくに終わっており、今日も連絡がなかったとあきらめた。しかし、寝室に置いてあったスマートフォンでもう一度メールをチェックした。するとトゥーリー氏からのメールが届いていたのだ。「おめでとう」が目に入った。添付ファイルを見るためパソコンに戻った。両親や弟は眠っていたので心の中で彼は「やったー！大学に行ける！」と叫んだ。

2013年の夏までにモンマス大学は新年度に向けて10人のシリア人学生を受け入れた。男性が7人、女性が3人である。冬学期にはさらに数人が来る予定である。10人の新入生たちは合格通知を受け取るとすぐにビザを申請した。アナスの場合、1回目はうまくいかなかったがなんとか新入生オリエンテーションの直前にビザを取得することができた。

一方、トゥーリー氏は同僚たちと共に留学生たちの到着に備えた。ボランティアの家族がイスラム教徒のための肉料理を準備した。宗教学科の部屋の一部が彼らの祈りの場所になった。また、留学生寮の玄関にシリアの国旗が加えられた。

シリア人留学生の中には親戚と一緒に来る者もいたがほとんどの学生は1人でやって来た。バスで来る者、鉄道で来る者、空港に着く者、到着時間もばらばらであった。何を持ってくるべきか、シカゴからモンマスまでの行き方、フランス語の授業があるか等々、出発直前の質問が多数寄せられた。フェイスブックで新入生クラスのページに次のようなメッセージを寄せ、未来のクラスメイトに伝えた。「5か月間準備をしてきて、明日やっとシカゴに着きます。わくわくしています。みんなに会えるのを楽しみにしています。」

アナスはバイルートからパリ経由でシカゴに到着した。彼にとって飛行機に乗るのは初めてだったので体調を崩すのではないかと心配だった。空港での入国審査はすんなりといかなかった。係官が別室で更なる質問を浴びせた。彼はその時のことを後で次のように語った。「僕はたったの18歳だったのです。疑われるようなことをするはずもないのに。僕がシリア人だったからでしょうか？」しかし、ついにピオリア行の夜行バスに乗って午前2時ごろモンマス大学に到着した。すぐにフェイスブックで両親にメッセージを送り、持

参したシーツを敷き、眠りについたのであった。

その後、他の留学生たちもやって来た。オリエンテーションが始まって数日後、悲惨なニュースが届いた。ダマスカスの東部で化学兵器によって数百人が死亡したのだ。詳細はまだ不明であったが、シリア政府軍の関与が示唆された。週末には地中海にいるアメリカの駆逐艦がシリアに向けてミサイルを発射したとのニュースが届いた。

その頃、モンマス大学では新年度の始まりに対する期待感が高まっていた。学生寮では様々なイベントが催され、キャンパス全体が活気に満ちていた。しかし、授業の初日、アメリカ政府は3日以内にシリアへの攻撃が起こりうると発表した。アナスは、家族が既にトルコへ避難しており、アメリカはもっと早く行動を起こすべきだと思った。一方、マリエラは、まだアレッポにいる家族のことを案じ、アメリカ軍が攻撃をしないよう願っていた。

モンマス大学でのシリア人学生

モンマスの町は人口9400人あまりの小さな町である。有名なことといえば、保安官ワイアット・アープがここで生まれたことやロナルド・レーガン元大統領が子供の頃この町に住んだことがあることぐらいである。時折、バーリントン・ノーザン・サンタフェ鉄道の列車が汽笛を鳴らしながらこの町を通り過ぎる。

9月半ばになると大学のキャンパスには活気が出てくる。シリアからの留学生の中には同好会に入る者もいる。アナスは留学生クラブの副部長になった。彼はロッククライミングの練習用に作られた人口の岩壁にも挑戦している。彼のフェイスブックの写真には壁のてっぺんから手を振っているものもある。マリエラは今や大学の小さな室内楽団のコンサートマスターであり、主席バイオリニストでもある。大学の教員たちは最初は彼らが大学になじめるかどうか心配していたが、これまでのところ問題はなさそうである。

しかし、シリア人留学生たちは英語と格闘している。アナスはシリアの学校での授業やアメリカ映画を見て英語を学んだが、頻繁にライティングセンターに通って、レポート作成の指導を受けている。アナスは寮の部屋では常にグーグルの翻訳機能を使えるようにしている。アラビア語の上に英語が表示される。毎日何度も翻訳機能を使って英語の語彙を増やす努力をしている。

文化人類学が専門のクッピンガー教授はエジプトに住んだ経験がありアラビア語を話すことができる。彼女はモンマス大学のアメリカ人学生にシリアについて教えている。彼女の「リベラルアーツ入門」クラスには2人のシリア人学生がおり、シリアに特化した授業を展開している。ある日の午前の授業には15人の一年生が出席していた。ドイツ語なま

りのあるクッピンガー教授は伝統的なアラブのスナック菓子の包みを開けた。種なしナツメヤシ、イチジク入りのショートブレッドクッキー、ピスタチオ入りのごまペースト等々。教授は学生たちに「シリアについて何か知っていることはありますか？」と問いかける。一人の学生が手を挙げて「アサド大統領はシリア人に対して化学兵器を使用しています。2年前に内戦が始まりました。アメリカは内戦を終わらせるために関与しようとしています」と答える。クッピンガー教授は学生の発言を板書し、アラブの春以来のシリア情勢に言及して次のように言う。「現時点ではアメリカの介入についてはどうなるかわかりません。200万人のシリア人が既にシリアから逃れました。さらに500万人が故国を去ろうと思っています。即ち、シリア人全体の4分の1がどこかに逃げようとしているのです。」教授はさらに「アサド政権を支持している国はどこですか？」と問いかける。すると別の学生が「ロシアとイランです」と答える。じっと聞いていたシリア人学生のサメルは「中国もです」と小声で言う。

シリアではサメルはアレppo大学の1年目を修了した。しかし、大学に通うのが危険になったため行かなくなった。シカゴに住む姉夫婦は2012年彼をシリアから脱出できるよう働きかけ、大学への入学手続きもしてくれた。しかし、彼は故郷に思いをはせる。彼は「母国を去るなんて恥ずかしいです。僕の心はシリアにあるんです」と言う。モンマスに着いて数日後、彼はシリアでの化学兵器の使用に対する反対運動に参加するためにシカゴへ行った。ガスマスクがデザインされた黄色のTシャツを着て、反政府軍の旗を振りながら行進した。しかし、彼は故郷ホムスでのデモとは全然違うと言う。シカゴと違って、ホムスでは集会はとても危険なことであり、そこに集まった人々はこころを込めて叫んでいた。彼は最新の情報を得るために一日に何度もフェイスブックのホムスやアレppo大学のページを見ていた。時々友人との交信が途絶えることがある。5月11日に会った友人との最後のチャットを見ていた。数日後、その友人が殺されたことを知ったのである。

マリエラのコンサート

9月も終わる頃、マリエラはアメリカでの初めてのコンサートの最終チェックに余念がなかった。モンマス大学でのファミリーウィークエンドが近づいていた。その土曜日の夜マリエラはバイオリンの演奏をすることになっていた。室内楽団の団長はその演奏曲として『ハンガリー変奏曲』を選んだ。マリエラはアラビア音楽を連想させるその曲をとてとても気に入った。

マリエラは一日に5～6時間モンマス大学音楽学部のオースティンホールで練習する。彼女は普段キャンパスでシリア人学生と話をするが、コンサート前の1週間は食事中以外

は彼らに会わなかった。彼女は冗談で「私に会いたかったらオースティンホールに来て。そこで寝泊まりしているから」と言う。

マリエラの両親はまだアレッポにいる。彼女はいつも両親のことを心配している。故郷を思うと集中力が弱まる。アレッポの情勢は悪化しており、自分ではどうすることもできない無力感を感じる。アメリカ軍の介入が準備される中、シリアでの戦闘は続いている。

シリアではマリエラの母親は娘のすべてのコンサートに出かけた。しかし、今回は電話で話すことしかできない。その電話もなかなかつながらない時もある。コンサートの前日、電話がつながり、両親のアパートの近くが砲撃され、近所の人が数人死亡したという知らせを聞いた。コンサートの当日は悪いニュースは聞かなかった。母親は電話口で「いつもあなたのそばにいるよ。あなたのことを誇りに思っているよ」と言った。

マリエラはすでに2013年の春に演奏する初めてのソロコンサートのことを考えている。その演奏がモンマス大学を卒業した後の進路を決定づけるかもしれない。もっと大きな大学に行くのか？音楽大学に行くのか？彼女はアメリカでもっと勉強して将来はアメリカ人に誇りに思ってもらえるようなプロの演奏家になりたいと考えている。しかし、将来はどうなるかわからない。マリエラはすべてのシリア人の人生は今後の国情に左右され则认为る。そして、特に宗教の少数派や芸術家にとっては不安定な状況にあると考える。彼女が母国に帰れるかどうかわかるまでまだしばらく時間がかかるだろう。

今夜のマリエラの演奏はプログラムの最後に予定されている。演奏が終わると拍手喝采の中、あふれる笑顔で聴衆におじぎをするだろう。舞台裏では楽団長と抱き合うだろう。演奏前にマリエラはステージの近くに座っている友人に携帯電話を渡す。その夜、マリエラは自分の演奏シーンをフェイスブックとユーチューブにアップロードする。両親が見てくれることを願って。

（2013年11月8日号）

訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はリビー・サンダー氏である。

2011年1月に始まったシリアの内戦は現在もなお続いている。この内戦でこれまでにおびただしい数の死傷者、難民を生み出している。国際連合は内戦の終結をめざしさまざまな措置を講じているが、うまく機能していない。

そのような中、大学進学を目指すシリア人の中にはアメリカの大学へ向かう者も多い。世界中の高等教育機関が戦火の中にある学生たちに対する支援活動を行っている。本稿ではアメリカ合衆国イリノイ州にある小さな大学の熱心な取り組みを紹介している。幸運にもその大学に入学できた女子学生マリエラと男子学生アナスのアメリカ行きの経過が詳しく報告されている。故郷を離れざるを得なかった2人であるが、将来一日も早く内戦が終結し、平和が訪れることを願うばかりである。なお、訳者はモンマス大学でのマリエラの感動的なコンサートの模様をユーチューブで見ることができた。